

歴史から学ぶということ

板橋区立志村坂下小学校 6年生
竹内あかり

その手紙を読んだ時、私ははっと息をのみました。「いつまでも、いつまでも、お元気で。」他愛もない、そんなあいさつは七十八年前の日本では、永遠の別れを告げる言葉になり得たのだと知りました。

九月、社会科見学で訪れた昭和館には、太平洋戦争中、海軍が編成した「神風特攻隊」の搭乗員となり、若くして命を落としていった若者たちの手記が展示されていました。日本はアメリカに圧倒的な国力の差を見せつけられ、戦争を始めてしばらくすると、もはやまともには戦えなくなっていました。

そこで海軍が考え出したのが、飛行機や小型艇、潜水艇を操縦したまま、アメリカの軍艦に体当たりして破壊を狙う「特攻」でした。爆弾を落とすよりも命中率が上がることなどから考え出されました。敗色が濃厚となった日本が逆転を夢見て編み出した戦法で、搭乗員は生きて帰ってくることを考えない残酷なものでした。

日本では負けが続いて、多くのパイロットたちが戦死していたので、特攻に参加した多くの搭乗員が、新たに志願したり、召集されたりした十～二十代の若者たちでした。特攻は兵士たちが自発的な思いで参加するということになっていましたが、実際には拒否できないものでした。例えば、上官は白い紙を兵士たちに配って、特攻隊に参加したいか、したくないかを書かせます。

でも、この時に「参加しない」と書けば、「非国民」「軍人の恥だ」とののしられ、暴力を振るわれます。周りの兵士からも糾弾されるため、誰もが「参加したい」と書いていたのです。当時は「お国のために死ぬ」ことを子供の頃から教え込まれ、そう思い込まされた事情もあります。

自由や平和にあふれているように見える今の日本で、こんなことが再び起きるのでしょうか。私は油断すれば起きると思います。太平洋戦争が始まるわずか二十年ほど前は、「大正デモクラシー」と呼ばれる時期で、西洋の音楽やファッションが盛んで、民主主義を求める世論が高まった時代だったそうです。

それが欧米に負けまいと、植民地を広げて国を強くしようとしたことで、戦争の泥沼にはまり、やがては自分たちの首を絞めることになったからです。

平和は努力しなければ、維持できないものです。少しでも油断をすれば安易に戦争をしかねません。その時、最もつらい形で犠牲になるのは、特攻隊員のような若者たちです。

まずは、過去の歴史を振り返り、長い目で見れば戦争によって、人々が幸せになることはないことを学ぶことから始めるべきだと思います。もちろん、簡単な事ではありませんが、そのような思いを多くの人々が持っていれば、戦争を支持する指導者は選ばれません。だからこそ、民主主義は大切だと思います。

審査員からのコメント

【岸本葉子さん・エッセイスト】

展示品の中の一通の手紙に着眼し、それを入口にした構成力が素晴らしい。ごくふつうに交わされる挨拶文のような手紙から、背景にある歴史とその時代に生きた人々の苦しみや葛藤に思いをいたす理解力、それを伝える文章力にも目を見張るものがあります。過去の悲劇に終わらせず、現代にもひそむ危機ととらえ、今を生きる私たちがなすべきことや民主主義の価値にまで、考えが及んでいます。

【関沢まゆみさん・国立歴史民俗博物館教授】

「歴史から学ぶということ」は、兵士の家族に宛てた手紙の「いつまでも、いつまでも、お元気で」という言葉が永遠の別れの言葉であることを考え、「若くして命を落としていった」特攻隊の若者たちの手記の展示から、特攻という組織と個人の意思との関係について分析をしています。そして、「平和は努力しなければ、維持できない」と述べ、過去の歴史に学ぶことの大切さを指摘しているところが良かったと思いました。

【伍藤忠春・昭和館館長】

平和や自由の大切さとそれを守ることの大変さに深く思いを寄せ、その上で歴史から学ぶことの重要性和国の進路を誤らないための民主主義の重要性にふれており、視野の広さを感じます。